

教室談話における境界マーカ― 「はい」と教室外での使用

—その使用制約に注目して

山元一晃

●要旨

本稿は、教室談話において頻繁に用いられる境界マーカ―「はい」とそれに伴って用いられる「じゃあ」を中心に、①「はい」が実際の教室談話でどのように用いられているのか、②「はい」が教室以外の場面で用いられる場合には、どのような制約が現れるのか」を分析する。①ではSinclair & Coulthard (1975) の教室談話の構造モデルの中でどの位置に現れるのかを示す。また、②では、「はい」は一定の制約の下で用いられることを示す。教室談話では特に境界マーカ―として用いられる「はい」が、教室談話以外の談話では、談話の進行を管理する者が使えるマーカ―として機能していることを示し、教室の外においては一定の制約の下で用いられることを主張する。

●キーワード

教室談話、「はい」の機能、談話標識、
談話の構造、境界マーカ―

●ABSTRACT

This article focuses on the usage of *hai*, one of the markers frequently used in classroom discourse from two points of view: (1) how this marker functions in classroom discourse and (2) the situations in which it can be used outside the classroom. In (1), I consider how and where this marker is used in classroom discourse and show that it functions as a boundary marker, marking the structures of the classroom model proposed by Sinclair and Coulthard (1975). In (2), I show that the use of *hai* is subject to certain conditions. In conclusion, the discourse marker *hai*, which typically functions as a boundary marker in classroom discourse, can also be used by a person to indicate control over the discourse only under certain conditions.

●KEY WORDS

classroom discourse, functions of "hai", discourse markers, discourse structure, boundary marker

The Functions of *Hai* in and outside Classroom Discourse Focusing on the limitations of its usage

KAZUAKI YAMAMOTO

1 はじめに

日本語の教室談話^[註1]では、ほかの談話ではあまり用いられない「はい」や「じゃあ」といった談話標識^[註2]が用いられ、教室談話の構造をマークしていることが、小中学校の教室談話や第二言語としての日本語教室談話のケーススタディで指摘されている（石井1997; 村岡1999; 山元2008a, 2008b）。これらの談話標識は、教師が授業を組み立てていく過程で用いられることが明らかになっている。

教室談話の構造をマークする標識は、教室内で教師が用いた場合には自然であっても、教室の外で用いると、不自然に感じられることがある。事実、教室内では、談話標識としての「はい」は表1のように頻繁に使用される。一方で、教室外での使用は、圧倒的に少なくなる。たとえば、多くの聞き手に対して1人の話者が話すことが多いという点で、講演は授業の教師の発話に似ているといえる。この講演の談話においても、「はい」はほとんどみられないことが先行研究のデータ（山根2002）からもわかる（8時間6分のデータで、1例のみ）。

表1 教師ごとの「はい」の出現回数と頻度^[註3]

	教師A	教師B	教師C	教師D
科目	数学	英語	国語	社会
出現回数（回）	35	39	45	67
出現頻度（回/min）	0.70	0.78	0.90	1.12

先行研究が指摘するように（Ohta 2001 など）、第二言語として日本語を学ぶ学習者が談話標識や応答詞を必ずしも適切に習得するわけではない。教室ではどのように使われているのか、また、教室外ではどのように使うことができるのかを明らかにすることは、学習者の不適切な使用を避けることにつながる。

本稿では、多くの日本語母語話者教師が教育を受けてきたと考えられる日本の公立の中学校の授業において、「はい」や「はい」とともに用いられる「じゃあ」などの談話標識を教師が用いている様子を具体的に観察する。さらに、「はい」が教師によってどのように用いられ、それが教師の指示とどのように

関わっているのかを分析する。また、教室外で使うことができる場合と、使うことのできない場合を比較することで、「はい」がどのような場面で使用可能なのかを考察する。

2 教室談話における構造化マーカーとしての談話標識

教室談話において、「はい」や「じゃあ」などといった標識は、境界マーカー（boundary markers）^[註4]として用いられる。これらの標識は、先行研究でも教室談話に顕著に用いられることが指摘されてきたことは上述の通りである。Sinclair & Coulthard（1975）は、教室談話の構造は次のようになっていると指摘する。最も大きな構造としてレッスンがあり、その下位に、授業内の活動であるトランザクションがある。トランザクションはエクステンジが組み合わさってできている。エクステンジはその基本構造として、IRF構造^[註5]を持つ授業内のやりとりのことを指す。さらに、各発話はムーブ^[註6]とよばれ、それぞれ特定の機能を担っている。Sinclair & Coulthard（1975）のモデルは村岡（1999）など他の先行研究でも妥当性が指摘されており、教室談話の構造としてある程度普遍的なものであると考えられる。また、Sinclair & Coulthard（1975）に先行する研究であるBellack et al.（1966）も、各構造の名称は異なるものの、同様の構造を認めている。

本稿では、教室談話の分析の枠組みとして、主にSinclair & Coulthard（1975）を用いる。「はい」は図1のようにSinclair & Coulthard（1975）の教室談話モデルの構造をマークすることが主張されている（山元2008b）。

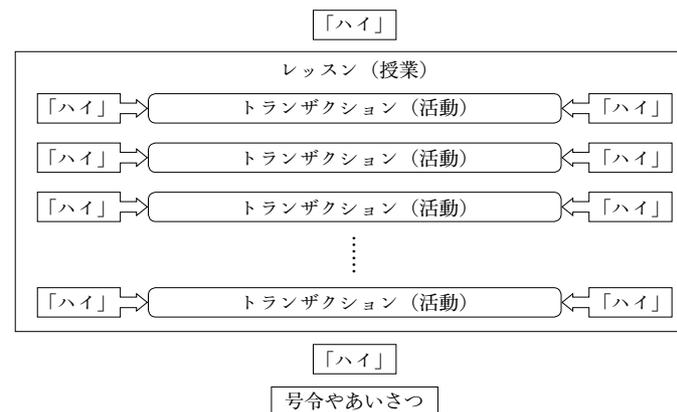


図1 教室談話の基本構造と「はい」（山元2008b）

2.1 本稿のデータと特性

本稿においては、千葉県の公立中学校の2年生向けの英語を例に示しながら論を進める。本稿を含む一連の研究においては、数学、国語のデータも用いているが、実際の談話例は、日本語教育との関連を考え、第二言語の教育現場である英語のデータのみを紹介する。また本稿では、教室談話の中でも特に教師の発話に注目する。

なお、本稿を含む一連の研究では主に、千葉県内の公立中学校の英語・数学・国語の50分授業、各1回分を扱っている。英語以外の科目においても概ね「はい」はここに記述した用法と同様に用いられている。

本稿で扱うデータは1人の教師による授業であるため、ケーススタディにすぎないが、「はい」の使われ方は、他の教室談話においてもある程度共通性があると考えられる^[註7]。

2.2 中学校の教室談話の構造と「はい」の使用

中学校の教室談話においては、「はい」が授業そのものであるレッスン、その下位にあるトランザクション、さらに、教師と生徒のやりとりであるエクステンションの各レベルが「はい」によってマークされることが観察される。授業の冒頭部では(1)のように、授業の終結部では(2)のように用いられる。

(1)

番号	発話者	発話内容	ムーブ
		[チャイムの音] [一斉に席につく]	
1	T	はい じゃあ はじめましょう	フレーム
2	T	Good Morning Everyone	開始
3	S	Good Morning Ms. Kato	応答
4	T	How are you?	開始
5	S	I'm fine thank you, and you?	応答
6	T	Fine thank you	フォローアップ

(2)

番号	発話者	発話内容	ムーブ
1	T	はい では次回7の1 7の2文法をまとめたいと思います	フレーム
2	T	予習やってある人 このあと見せてください	開始
3	T	はい じゃあ終わりにしましょう	フレーム
4	T	That's all for today	フレーム
5	T	Goodbye everyone	開始
6	S	Goodbye Ms Kato	返答
7	T	Thank you very much	フォローアップ

(1)、(2)で観察されるように、授業に相当するレッスンの最初と最後においては原則としてフレームムーブの発話がなされる。フレームムーブとは教室談話の構造のうちトランザクションを開始することのできる機能を持ったムーブのことである。これは本研究を含む一連の研究や、石井(1997)でも観察される。

(3)は先行する文脈でリスニング用のCDをクラスで聞きながら、ワークブックに穴埋めをした後に、理解できたかどうかを確認するところである。

(3)

番号	発話者	発話内容	ムーブ
1	T	はい じゃあ 確認しましょう	フレーム
2	T	ふたりがはじめて会ったのは	開始
3	T	いつだ?	開始
4	S	せん	返答
[中略]			
8	T	なんがつ?	開始
9	S	6月	返答
10	T	6月です	フォローアップ
11	T	JUNE 6月ね	フォローアップ
12	T	京都にある?	開始
13	S	すし屋	返答

14	T	すし屋とのこと	フォローアップ
15	T	はい2人の恋は	開始
16	S	ジョン ジョン	返答
17	T	ジョンさんか なるほどね	フォローアップ
18	T	はい ジョンハリソンさんのひとめぼれではじまったとか	フォローアップ
[中略]			
35	T	はい それじゃあ Close your listening books and open your textbooks	フレーム・開始

教室談話はトランザクションとよばれる授業内の活動がいくつか集まった形で構成される。「はい」は、このトランザクションの最初と最後にみられ、活動をマークするように「はい」や「じゃあ」が用いられることが観察できる。以上のように、教室談話においては、「はい」や「じゃあ」^[注8]を用いることによって教室談話を構成していることが観察される。

2.3 教室談話における指示と授業の構造化

2.2で述べたように、「はい」は授業全体をマークするとともに、授業内の活動であるトランザクションをマークする。各トランザクションでは(4-1)のように、続くトランザクションに入るにあたっての指示がなされることがある。

(4-1)

番号	発話者	発話内容	ムーブ
1	T	はい [じゃあ listen	開始
2	S	[先生ピンマイクみたいななんですか	開始
3	T	うん?	返答

ここで、教師は、「はい じゃあ」と発話した後に、これから流すCDを聞くように指示しようとする。しかし、ここで、生徒が教師の発話にオーバーラップしながら質問する。その後、教師は生徒の質問に応じ、(4-2)のように、さらに指示を続ける。4行目で、生徒とのやり取りが終わり、指示を再開する。

(4-2)

4	T	ピンマイク録音中です はい.	返答
5	T	Open your listening books please	開始
		(4.0)	
6	T	今日は何番だ	開始
		(14.0)	
7	T	じゅうななあ? くらい? イエス じゅうなな 飛ばしまーす 難しいのでじゅうはち	開始
		(3.0)	
8	S	記者会見のどこですか?	開始
9	T	うん?	返答
10	T	はい 記者会見のどこですね	返答
11	T	リスニングもってる? リスニングもってる?	開始
		(6.0)	
12		後ろに見してもらって	フォローアップ
		(5.0)	
13	T	はい じゃあ いいですか?	開始
14	T	記者会見 喜劇俳優のジョンハリソンと歌手の藤原紀子さんが婚約しました 下の記事は翌日の新聞に掲載されたものです 婚約記者会見の様子を聞き 記事の空欄に適する語句をかきましよう	開始

5行目で、今度はリスニングのテキストを開くよう指示がなされ、その後、6行目から7行目にかけての長い沈黙の間、教師は教科書の該当する箇所を探す。その後、再度、生徒対教師の1対1のやりとりが始まる。ここで、テキストを持っていないと思われる生徒に対して、持っているかどうかの確認および指示がなされる。このように、教科書を開くように指示してから、いくつかの確認のエクステンジが続き、その後、いよいよテキストに注目すべき段階になったときに、「はい じゃあ」と発話、さらに、「いいですか」^[注9]と発話され、教師がテキストの内容を読み上げる。ここで、全体に向けたやりとりへと移る。

「はい」や「じゃあ」は、教師が次にすべき指示をするときや、行う予定

だったトランザクションが開始される前に、挿入されたエクステンションを終わらせ、再度トランザクションに戻っていく場合に用いられていることが観察できる。また、山元 (2008a) が指摘するように、話題の切れ目でも用いられる。教師は、これらの標識を使うことによって、指示から活動へという流れを作り、授業をいわば構造化しているのだといえる。

3 「はい」の教室外での使用

2節で概観してきたように、「はい」や「じゃあ」といった標識は教室外において効果的に使われていることが観察できる。しかし、教室外でこのような標識を用いると不自然に感じられることがある。

(5) #^[注10] はい、2節に移ります。

(6) #はい、スクリーンをご覧ください。

(5) や (6) は、教室や大学の講義では自然になるが、講演や学会の発表などでは、少し不自然になる^[注11]。富樫 (2002) は、応答詞やあいづちとはみなせないような「はい」を「トピックの切れ目に現れる」(p.138) としており、「提示された情報が不完全な(中途半端な)ポイントでは」(p.140) 現れず、「情報がある程度まとまった形で提示された後か、あるいは逆に全く出ていないポイントのどちらか」(p.140) で現れるとしている。このことについて、山元 (2008b) も教室談話の分析で指摘している。また、富樫 (2002) は同じように用いられる「はい」と「うん」を比較し、「相手に提示できるような形で完成された情報の場合は「はい」が用いられ」(p.141) としている。

しかし、(5) や (6) が情報の切れ目で現れることは述べているが、教室談話以外で用いると不自然に感じられることがあることについては述べていない。また沖 (1993) や奥津 (1989) でもこのような「はい」について非応答詞として扱っている。富樫 (2002) と同様に、用いられる談話内の位置について言及した上で、「聞き手の注意をひくために「ハイ」という」(奥津1989:8) と述べているが、このような「はい」の教室外の談話における使用の制約については

述べていない。

また、教室談話以外の文脈で上に述べたような「はい」が用いられる場合について、富樫 (2002) は、ある程度まとまった意見を述べた後には述べることもできるとしている。例えば、(7) のように、学生が自分の意見を述べたあとに「はい」を用いることがある。

(7) [大学の講義で意見を求められた学生が]

日本の経済は傾いていくと思います。はい。

「はい」は自らの発言が終わった後に用いることができる。この場合の「はい」は、自分の述べたことに承認を与えることで、ひとまず自分の意見が終わったことを示せる。このとき意見を求められた者(話し手)が話し続けるのは不自然であると感じられる。このように「はい」を用いることで、話題の切れ目であることを示すことができる。なお、教室談話では、「はい」を用いて話題を区切っても、さらに話し続けることができるが(山元2008a)、自然会話では不自然に感じられる。

3.1 談話を管理する者の「はい」の使用

(8) のように会社の会議で、順番に発言することが決まっており、次の話し手に司会者が話を促すような場合には「はい」を用いることができる。教室談話で、次の活動に移る場合に用いられる「はい」に近いといえる。教室談話における教師や、会議における司会者のように、談話の進行を管理する役割を担うものによって使われるのだと考えられる。

(8) [会社の会議で]

A: はい、ありがとうございます。はい、じゃあ、Aさん。

(8) のように、教室談話以外では、その時点で談話の進行を管理している者が先行話者の発言を区切り、さらに次話者を選択したり、山元 (2008a) で指摘されるように、自分の発話を区切ったりするために「はい」を用いることがあ

る。教室談話で観察される「はい」と同様に、談話に一定の区切りを入れてその進行を管理していくことができるのだと考えられる。

談話の進行を管理する者が「はい」を使うことは、ラジオやテレビ番組などでも観察される。例えば、(9)のように、ラジオでアナウンサーが聴取者からの手紙を次々と読んでいくような番組でも観察される。

(9) はい、では、次のお便りは、千葉県市原市の鈴木さん。

ラジオは、(聴衆である)聴取者が介入してくることはないが、その番組に2人以上の話し手がいるような場合だと、相手に発話の機会を与える必要もあり、相手の発話に続いて話すこともある。一度「はい」と言うことにより、相手の発話を区切ったり、逆に自らの発話を区切ったりすることができ、相手に発言させたり、自らが発言したりできるのだと考えられる。また、1人の話者のみで進行される番組であっても、番組に一定の区切れがある限り、不自然にはならない。

教室談話では、「はい」は、活動の開始や終了場面で用いられる。一方、教室談話以外の談話では、(10)のように、スポーツのインストラクターや、料理教室の講師のような者が、次の指示を与えたり、依頼をしたりする場合には使える。しかし、談話の進行を管理する者が明確でない(11)のような場合には不自然になる。

(10) [スポーツのインストラクターが]

はい 足上げてください。

(11) [別の友人に対して]

#はい ちょっと塩とって。

(10)や(11)からわかるように、指示を出す場合にも、談話の進行を管理していることが明確でない限り用いることができないといえる。

一方で、談話の進行を管理できる者であっても、「はい」を使えないことがある。講演や学会発表などの講演者や発表者は、一定時間話すことが認められ

ており、談話の進行も管理できるといえるが、「はい」を使うと不自然に感じられる。

(12) #はい、2節に移ります。 ((5) 再掲)

(13) #はい、スクリーンをご覧ください。 ((6) 再掲)

(12)(13)のように聴衆が聞くことが期待され、かつ、他の話し手が介入してこないことが期待されるような談話では「はい」は使われない。談話の進行をあえて管理しなくても、話し手の意図したように談話を進めることができるためだと考えられる。また、会議や教室談話のように、話し手が変わる可能性もない。

談話内では、談話の進行を管理する者が明確であれば「はい」を区切りとして用いることができるが、聴衆が聞き、途中で割り込まれないことが期待されているような談話では用いられにくいのだと考えられる。

一方、談話の進行を管理する者が明確でない談話が続いたあとで、「はい」を用いることで、「談話の進行を管理する者」という役割を担うことにもなる。例えば、博物館の案内係が客とやりとりをした後に使われる「はい」について(14)や(15)のような例を考えたい。

(14) [客とのやりとりの後で]

A: はい、では、ご案内いたします。

(15) [コブラが飼われている場所の前で]

A: はい、みなさん、これがコブラです。世界で一番危険なヘビの1種とされています。

以上の例では、「はい」と言った者が「ここから談話の進行を管理できる」ということを明示できるのだといえる。

応答詞ではない「はい」が一般的な会話で用いられにくいことは、以上のことから説明できる。発話順番を取る者が決まっていない一般的な会話では、各々の話者が談話の進行を管理するという役割を担う必要はなく、「はい」と

言うことで、その役割を担うことになる。そのため、話者が意図的に談話の進行を管理しようとする(16)のような場合を除いて、「はい」の使用は不自然となる。

(16) [数名の話者が雑談をしている場面で]

A: はい、そろそろ、この間の話をしてもいいかな。

3.2 「はい」の教室談話以外での使用

3.1で、「はい」は、次のような条件で用いられることを確認した。

(17)a. 談話の進行を管理できる者が、発話や活動を区切り、次の発話や活動を始める時に用いる。

b. 談話の進行を管理する者が明確でない場合「はい」の使用は原則的に不自然になるが、「はい」を用いることで、談話を管理できる役割を担うことができる。

実際の談話においては、「はい」がどのように用いられているのかを簡単にみていきたい。本節では、話者の役割が明確になりやすい職場のデータを扱う。

次の(18)は、ある会社の会議で09Fが話した後に、09Gが次話者として選択される前に、司会者の09Aが09Gを指名する場面である。この場合は、09Aは会議の司会者であり、談話の進行を管理する者としての役割が明確であり、また次の話し手を指名することが期待されている。

(18)

3779 09F あと5番のCK点検で一、[社名]のあの一、奥のほうにあの、材料入れてゆう棚があったんですけど、そのとびらの前に台車が立てかけてあったってゆうことで、そうゆうとこ整理して、あと全体に、あの、そこ一置き方が乱雑なんで、整理整頓

のほう、よろしく、お願いします。

3780 09F 以上です。

3781 09A はいそいじゃー、[名字(09G)]さん。

3782 09G えー1番なんですけども一、あの一復帰作業一に行くさいにあの一、元(もと)電源を切つて一、えーすぐにあの一、札(ふだ)ですかあの一、###の札(ふだ)をとったんですけども一、復帰作業完了後、ま一、札(ふだ)をとったほうがいいんじゃないかな一と思うんです。

3783 09G あと、完了して一、する前に、いちおう札(ふだ)とって一って形でした。(職場)

また、(19)のように、店員が客に対して用いることも観察される。店員01Cが客01Hに対してお釣りを返したあとに用いられる。お金の授受を行い、感謝のことばを述べるという極めて頻繁に行われる行為であり、店員と客の行うべき役割が極めて限られている。また、店員は次々と客に対応しなければならず、談話の進行を管理していく必要がある。このような場合にも、「はい」は極めて自然に使用される。

(19)

159 01H 普通でいい。

160 01C 845円です。

161 01C 飲んでいきます↑

162 01C 45円のお返しです。〈間 30秒〉

163 01C はい、どうもありがとうございます。

164 01A ありがとうございます↑(職場)

また、次のように、お釣りを返すときや、客が店に入ってきたときにも観察される。(20)は、店員01Dが01Hに対して、お釣りを返すときに用いる「はい」である。

(20)

150 01D はい、じゃー 12円先にお返し★します。

151 01H →はい。←

152 01C どうもありがとうございます。

153 01A ありがとうございます↑〈間 5秒〉 (職場)

以上、見てきたように、自然談話においても、話し手と聞き手の役割が明確になっており、かつ、話し手と聞き手とのやりとりが頻繁に行われる場合には「はい」が用いられることがわかる。

4 まとめと今後の課題

本稿では、教室談話で頻繁に使われる談話標識である「はい」が教室談話においてどのように使われ、教室以外の談話で使われる場合にはどのような場合に使うことができるのかを記述した。その結果、教室談話外であっても、談話の進行を管理している者でないと使いにくく、また「はい」を使うことで談話の進行を管理する者であることを示せる可能性も示唆した。

日本語教室においても「はい」は頻繁に用いられることから、「はい」が教室談話外で使うことのできる状況を記述したことには一定の意義があると考えられる。

しかし、本稿は、教室談話における用いられ方を記述し、教室外の談話における使用の制約を記述したにすぎず、応答詞としての「はい」も含めた包括的記述には至っていない。先行研究においても、応答詞との関連から議論しているものは少なく(富樫2002など)、使用される状況を記述しているにすぎない。今後は、以上の点も含めて記述していく必要がある。

〈筑波大学大学院生〉

注

- [注1] …… 本稿における「教室談話」は、高等教育および幼児教育をのぞく教室で教師と児童・生徒の間で行われる授業の談話や数名から数十名の学習者を対象として行われる第二言語の習得を目的とした授業の談話をさす。以上の定義にあてはまらない談話を「教室談話」とする研究は管見の限りみあたらない。
- [注2] …… 本稿では、形式に着目するため、「談話標識」の定義について議論することは避ける。Shiffrin (1987) は「発話の単位をブラケットする(発話)連鎖に依存する要素」(sequentially dependent elements which bracket units of talk) (Shiffrin 1987:31) としており、この定義を便宜的に用いる。
- [注3] …… 本稿では、応答詞や相づちとしての「はい」は除外して考える。したがって、相手の発話に対して応答するように用いられる「はい」は考えない。また、表1における教師A～教師Cの授業は千葉県内の公立中学校の授業で約50分間、また教師Dは千葉県内の学習塾の授業で約60分間のデータである。
- [注4] …… 本稿では境界マーカーを「教室談話の構造をマークする標識」とする。
- [注5] …… Sinclair & Coulthard (1975) は、教室談話内の各エクステンジは、Initiation (開始)、Response (返答)、Feedback (フィードバック) からなるIRF構造を持っているとする。
- [注6] …… Sinclair & Coulthard (1975) は、各ムーブおよびエクステンジについてラベリングを行っている。村岡 (1999) にわかりやすく説明されている。
- [注7] …… 石井 (1997)、山元 (2008a, 2008b) などを参照。
- [注8] …… 「はい」と「じゃあ」は頻繁に共起することが観察されるが、今後の課題としたい。
- [注9] …… 「いいですか」については、本稿においては、紙幅の都合上議論を避けるが、近藤 (2004) で詳しく考察されている。
- [注10] …… #は特定の状況において不自然になることを示す。
- [注11] …… 講演者がスライドを探すのに手間取っており、スライドが出てきた場合には用いることができる。

参考文献

- 石井恵理子 (1997) 「教室談話の複数の文脈」『日本語学』16(3), pp.21-28. 明治書院
- 奥津敬一郎 (1989) 「応答詞「はい」と「いいえ」の機能」『日本語学』8(8), pp.4-14. 明治書院
- 沖久雄 (1993) 「肯定応答詞と否定応答詞の体系」『日本語学』12(4), pp.58-67. 明治書院
- 近藤由美 (2004) 「教室における教師の「いいですか」の発話機能」『ことばの科学』17, pp.25-37. 名古屋大学言語文化研究会
- 富樫純一 (2002) 「「はい」と「うん」の関係をめぐって」『「うん」と「そう」の言語学』 pp.127-157. ひつじ書房
- 村岡英裕 (1999) 『日本語教師の方法論—教室談話分析と教授ストラテジー』凡人社
- 山根智恵 (2002) 『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版

- 山元一晃 (2008a) 「教室談話における教師の「ハイ」の機能—話題の完成という観点から」『筑波応用言語学研究』15, pp.127-238. 筑波大学大学院博士課程人文社会科学研究所
文芸・言語専攻応用言語学領域
- 山元一晃 (2008b) 『教室談話における「ハイ」の談話構成機能』平成20年度筑波大学大学院文芸言語専攻修士論文
- 山元一晃 (2011) 「談話標識「はい」の語用論的考察」『日本語学会2011年度秋期大会予稿集』 pp.171-176. 日本語学会
- Bellack, A. A., Kliebard, H. M., Hyman, R. T., & Smith, F. L. Jr. (1966) *The Language of the Classroom*. New York: Teachers College Press.
- Chaudron, C. (1988) *Second Language Classroom*. Cambridge: Cambridge Learners Press.
- Schiffirin, D. (1987) *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sinclair, J. M. & Coulthard, R. M. (1975) *Towards an Analysis of Discourse: The English Used by Teachers and Pupils*. London: Oxford University Press.
- Ohta, A. S. (2001) *Second Language Acquisition Processes in the Classroom: Learning Japanese*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.

用例出典

(職場)『男性のことば(職場編)』(現代日本語研究会(編)(1998)ひつじ書房)付属CD-ROM